

初の英文京都ガイドブックと 京都の国際的観光地化における耳塚

The First English Guidebook of Kyoto, and Mimizuka in the
Development to the International Touristic Destination of Kyoto

川内 有子*

Abstract

The Guide to the Celebrated Places in Kyoto & The Surrounding Places (below, *The Guide*) was published in 1873 in tandem with the Second Kyoto Exhibition. It was the first English language work which introduced and showcased Kyoto to foreign visitors. Kakuma Yamamoto, who was an advisor to the Kyoto Prefecture government, published it with Keisuke Niwa. Saijiro Ishida created the copperplate prints and maps included within *The Guide*. This paper takes up *The Guide*, hitherto mentioned in its name only, explains the historical background surrounding its publication, and provides an overview of its contents. This paper also provides commentary on Mimizuka (called the “Ear Mound” or the “Ear Tomb”) by comparing and cross-referencing the mentions of Mimizuka within *The Guide* with other records. In this way, this paper clarifies the position of *The Guide* in Kyoto’s historical development as an international tourist destination.

* 立命館大学文学研究科研究生

はじめに

1873年、第2回京都博覧会の開催¹⁾と関わって、1冊の観光案内書が発行された。*The Guide to The Celebrated Places In Kiyoto & The Surrounding Places* (以下、*The Guide*)と題されたこの本は、初めての、英語で書かれた外国人向けの京都案内書である。発案や各名所の選定、解説部分の制作は、当時、京都府顧問であった山本覚馬と、丹羽圭介が中心となってい、銅版画の地図や挿絵は、石田才次郎によって制作された²⁾。文字は、英字の活字を用いて印字されているが、後の丹羽の回想によると、これは「京都最初の欧文活版印刷」を用いた印刷物であった³⁾。さらに、石田才次郎の孫、徳次郎によって1981年に同志社図書館所蔵本から作成された複製版に付された説明によれば、この本は、博覧会のために来京した外国人接待のために300部限定で発行されたという⁴⁾。

この案内書は、発行部数の少なさからも推察されるように、普及範囲が狭かったため、書評や、これを利用した外国人の旅行記などを確認することはできない。しかし、既往研究においては、幕末の騒乱や1869年の天皇の東京再幸による都としての地位の失墜から立ち直るために始まった京都の博覧会事業の研究において、第2回京都博覧会が第1回京都博覧会よりも多くの観覧客や出品者を得ることができるように行われた施策の一つとして書名があげられてきた⁵⁾。明治になってもなお、外国人の内地旅行の許可制度は継続しており、特に、天皇の御座所であった古い都、奈良と京都は格段に厳しくその出入りを制限していた。そのため、1872年の博覧会の開催に伴い、博覧会の会期中、外国人の入洛が公式に認められたことは、外国人の内地旅行の歴史、および京都の近代的な都市としての展開の上で重要な出来事で、*The Guide*は京都が外国人へと開かれていく過程の最初期の資料として位置づけられている。本稿では、従来、書名への言及は幾度かなされてきたものの、本そのものについてはほとんど検討されてこなかった*The Guide*に

ついて、制作背景の確認を改めて行い、本全体の概要、および、他の記述と比較して丁寧に解説された耳塚の記述の考察を通して、京都の国際的な観光地としての展開における本著の位置づけを明らかにしたい。

博覧会の外国人誘致施策における位置づけ

ではまず、第2回京都博覧会の開催にあたって行われた外国人誘致策についての確認を通して、*The Guide* の企画された事情について考えてみたい。

外国人の足を京都へ向かわせることは、京都の近代化と勸業を目的として明確に打ち出した1872年の第1回京都博覧会から、主催者である京都博覧協会にとって最重要の課題の一つであった。福井庸子は、博覧会における外国人に対する販売を通して外国向け輸出製品のアイデアを得ようとする動きがあったことを指摘しており⁶⁾、実際、第1回京都博覧会の終了後、外国人の入洛が京都の人々に利益をもたらしたため、彼らが横浜のように京都にも外国人が自由に出入りし商売ができるようになることを望んでいるとの報道が横浜の外国人居留地でもなされている⁷⁾。勸業と並んで、外国人に観光地として京都をアピールすることもまた重要視された。京都博覧協会の解散に際して回顧録として出版された『京都博覧協会史略』には、「開港地でも開市場でもない」京都に外国人の足を向けさせるため、「博覧会の第二の使命は京都を日本随一の観光地として汎く外国人にも宣伝紹介することにあつた」とある⁸⁾。博覧協会は、京都の勸業と国際的な観光地化という2つの目的のために外国人の入洛の正式な許可を政府から得ようと積極的に働きかけ、1871年から1872年にかけて陳情書やその返答の催促を行い⁹⁾、粗相が起らないよう、警察官を巡回させる手管まで整えた。それだけでなく、外国人が滞在できる施設の確保や、入京規則や宿泊施設における振る舞いなどについて述べた冊子を英訳し、木版刷りで作成した¹⁰⁾。また、会場における外国人の応接には、長崎、足羽、豊岡、宇和島、広島、大阪、兵庫な

どから通訳官を呼んで備えていた¹¹⁾。その力の入れようは、博覧会が外国人のために開催されたのだという誤解を日本人側に引き起こすほどであったという¹²⁾。

外国人にとって、長い間入ることを許されなかった「聖域京都¹³⁾」は好奇心を掻き立てる場所で、京都から最も近い外国人居留地であった神戸に住んでいたフランス人ドレウエル夫人も、「多くの外国人がこの機会に古い日本の首都を見物したものです¹⁴⁾」と回想している。博覧会を機会に京都に外国人を呼びこもうとする試みは、外国人の目には、実際、どう映っていたのだろうか。第1回京都博覧会を訪れた外国人観覧客の実数は、日本人観覧客38,634人(学生7,531人含む)に対し、770人であった¹⁵⁾。この観覧客数は、主催者である博覧協会には一応の成功として受け止められていたものの¹⁶⁾、まだ改善の余地があるとも考えられていたようだ。吉岡拓は、同時期に開催された他の地方都市における博覧会の観覧客動員数と比較すると第1回京都博覧会の観覧客数が決して大きな成功とは呼べなかったため、日本人、外国人両方の関心をより多く集めるために第2回以降は主会場が御所に移されたと指摘している¹⁷⁾。外国人からも、770人という外国人観覧客数は誘致施策の失敗として認識されていた。横浜で出版されていた英文雑誌 *The Far East* は、博覧会の第一報として *Hiogo News* の記事を転載し、その半月後に独自のレポートを掲載しているが、次に引用するように、これらの記事はどちらも、会期中、外国人があまり京都を訪れていなかったことに言及し、その原因は、開催の前月に各公使館へ博覧会の開催と外国人の入京許可を伝達するという¹⁸⁾、告知の遅さにあったと述べている。

...the notice given of the holding of the Exhibition was too short. To obtain any amounts of foreign patronage, one year's notice should have been given.¹⁹⁾

博覧会の開催の報せが直前過ぎた。外国人観覧客をある程度得るために

は、1年の猶予は与えられるべきだった。

The mistake they made was giving so short a notice of the exhibition; and in taking no steps to give particular publicity to the fact of its being about to take place.²⁰⁾

彼らが犯した誤りは、博覧会の報せをあんなに直前にしたことだ。そして、間もなく開催されるという事実を特に周知させようと手を打たなかったことにある。

また、実際に博覧会に取材に訪れた記者個人の感想は、「その歴史や伝説、もしくはそれらに関係するもの全部といったこの都市の興味をそそる特徴が無視されている (...the interesting features of the city, its history, legends, or anything relate to them, have been ignored.)²¹⁾」ことを残念に思う、というものであった。

The Guide が制作された第2回京都博覧会では改善策がいくつか講じられ、結果として、外国人の入浴が初めて許されたことで注目されたであろう前回は下回ってはいるものの、それほど数を減らすことなく、634人の外国人を迎えることができた²²⁾。先述した御所での開催もその一つであったが、今回は、開催の報せが開幕の前々月に各公使館へ伝えられた。初期の京都博覧会の実施を巡る博覧協会、京都府、政府の間の文書によってその舞台裏を考察した丸山宏によると、これは、博覧協会や京都府の外国人誘致策の改善へ向けた努力の結果であったようだ。第2回京都博覧会の開催向け、博覧協会は1872年5月17日に京都府へ上申し、府は6月に外国人への伝達を政府へ願い出ている。それが一度差し戻されると、「この春の博覧会開催の布達が行き渡っていなかった」ことを考慮してほしいと再度強く要望したという²³⁾。政府を通じた、出品の募集も含めた正式な告知は博覧会の前々月であったが、博覧協会の翌年への取り組みが早く始まったために、翌年も博覧

会が開催され外国人の入京も許されるだろうということは、在日外国人の間で1872年8月頃には知られていたようである²⁴⁾。

一方で、外国人を迎えるための細かな対応については、第2回京都博覧会でもそのまま課題として残されていた。例えば、博覧会に出品をする際には品物の説明書きを付すようにという規則²⁵⁾が第1回京都博覧会から施行されていたのだが、外国人が出品者の場合、各書類に日本語訳を添えて提出することが求められていた。つまり、会場において観覧者らが展示物を理解し、また購入や商談を行うために情報を収集するための説明書きは、すべて日本語で用意されていたのである。通訳官も会場に常駐させていたものの、来場した外国人の旅行記には、「あまり良い話ではないが、案内書もないうえに、展示物に付けられている名札も日本語で、私には分からなかった (It is not a good account, but there is no guide book, and as the names attached to the articles are in Japanese, I was not much the wiser.²⁶⁾)」という感想が述べられている。

以上から、博覧会への外国人誘致策が手探りで進められる中で *The Guide* も制作されていたという当時の状況が見えてくる。300部という発行部数は前年の来場者数から予想される人数よりも少なく、これがあくまで接待用のお土産で、外国人観覧者全員に配布するつもりがなかったことが分かる。しかし、英文活字や銅版画を使用した京都案内書の制作は、第1回京都博覧会の際に外国人が不満を示した京都の歴史や文化への案内の不足を解消する博覧協会の努力や、英字の活版印刷という新技術を実践できるという点で、十分意義のある実験的取り組みだったと言えるだろう。

The Guide の内容の検討

それでは、*The Guide* の全体の概要を、構成、挿絵、本文の順に検討することにより、この本の性格について考えてみたい。

この案内書は、内表紙と序文、目次、挿入された京都市中心部の地図と周辺地の2枚の地図、それに続く48頁にわたる解説を含んだ、全部で50頁あまりの薄型の冊子で、京都やその周辺の名所や見どころについて47の項目に分けて紹介している。解説された内容の構成は、町の紹介が2、寺が26、神社が7、産業の紹介が2、ランドマークが11である（瀬田粟津と石山寺は本文上では1項目として扱われているが、本稿ではランドマークと寺とに分けてカウントした。なお、詳しい内訳については表1を参照）。案内書で紹介された場所の内訳は、冒頭の「京都の街（The City of Kiyoto）」において述べられている「寺や神社といった祝福された素晴らしい場所を含んでいることで最もよく知られ、さらに、絹の着物や陶器のように人類に必要な産業でも非常に有名である。（It is a most famous city for containing a great many celebrated and splendid places, temples and shrines, and it is the most famous for manufactures which are necessary to the mankind as the silkdresses and the earthen wares &c.）²⁷⁾」という街のまとめと合致したものとなっている。名所として選ばれた場所は、「東大谷（Higashiotani）」「黄檗（Obaku）」を除くと、すべて江戸時代以前に建立されたものであり、江戸時代以降に行われた改修や建築にふれているのは、幕府によって行われた1709年の西大谷の改修と、博覧会に際して外国人用に整備された円山のホテルのみであった。こうした取り上げる内容の傾向からは、*The Guide* が京都の歴史や伝統にフォーカスしたものだたと指摘することができる。

つぎに、案内書全体の内容の紹介を兼ねた「京都の街（The City of Kiyoto）」を除く46の項目の各頁の上部に、別刷りされた上で一枚一枚貼り付けられた、銅版画による挿絵に言及する。これらの挿絵は先述したとおり、石田才次郎によって制作されたものと思われる。これらの挿絵の特徴は、「清水の焼き物（The Earthenware of Kiyomizu）」と「西陣（Nishijin）」に付されたものを除いて、風景を描いたものが西洋的な遠近法を駆使し、風景写真のように正確にその空間を描いたものである点にある。長谷川奨吾は、東京遷都や

明治維新の戦乱による都市としての衰退から京都を救う手立てとして明治期に「京都らしさ」の形成が行われ、その過程が表れたものとして、明治期に出版された名所案内記における名所の表象を分析している。この論考の中で、長谷川は、文字富之助によって執筆され、1885年に出版された『開化絵入京都見物独案内』の挿絵が風景写真のような視点で描かれていることに注目し、その構図と内容が1880年までに出版されたとされる写真帖『京都名所撮影』と非常に多くの点で共していることを指摘している²⁸⁾。『京都名所撮影』は、国際日本文化研究センターのデータベースの解説において、「表題として日本語の「京都名所撮影」と共に、英語で「JAPAN KIYOTOMEISHO PHTOGRAPHER」と記されている²⁹⁾ことから、外国人用の土産物として発売されたものと思われる。」と紹介されている。*The Guide*の挿絵を、長谷川が言及したこの2つの出版物と対照させてみると(表2にその結果を示した)、指摘されている2書よりも*The Guide*と『開化絵入京都見物独案内』の挿絵の方が、取り上げている名所および構図において共通点が多いことが分かった。『京都名所撮影』とは、23枚の写真の内、同一の名所を取り上げたものが17枚、そのうち構図まで近似しているものは4枚であった一方、『開化絵入京都見物独案内』とは、37枚の挿絵のうち、21枚が*The Guide*と共通した名所を描き、さらに近似した構図を持っており、両者の間の影響関係を伺わせる。ただし、『開化絵入京都見物独案内』と*The Guide*の本文には挿絵に見られたような類似性はなく、また、『開化絵入京都見物独案内』の挿絵が誰の手によるものか記載がないため、直接的な関係性の有無については不明であり、本稿では、*The Guide*がその後の京都の案内書の制作に影響を残した可能性を指摘するにとどめたい。

続いて、名所解説の本文の検討から、原著の性格について考えたい。各名所の解説文のほとんどは、類似した構成で書かれており、寺社の場合、建立した人物や建立された年が、ランドマークの場合はそこにある名所の見るべきものの種類が言及される。続いて、現在目にすることができる建物の特徴

や京都の人々がその場所とどのように親しんでいるかなど、同時代的な情報を記し、最後に、紹介した場所の位置を、三条大橋を起点として、例えば、西へ何「町 (Cio)」、または東へ何「里 (Ri)」などの形で指し示している³⁰⁾。このように位置情報を記載する理由については、「京都から大津または伏見などへ何町か市民に尋ねた際、この橋を使って教えるというのが習慣であるため、私もこの橋からすべての場所への距離を言及しようと思う (as it is the habit that a citizen will tell you with this bridge when you ask him how many Cios it is from Kiyoto to Otsu or Fushimi &c, so I will mention the distance from this bridge to all places.)」と、京都の市民の地理感覚上で三条大橋が京都の中心として意識されているためであることが説明されている。山近博義によれば、三条大橋を距離表示の起点とする地図記載の方法は、京都の都市空間の変化を反映して18世紀以降に見られるようになったものであり³¹⁾、『開化絵入京都見物独案内』でも引き続き用いられる日本人にとって馴染み深い表記法であった。しかし、第2回京都博覧会の主会場である御所や、外国人向けの宿泊施設が集まっていると本文中でも紹介される円山でもない場所が起点の距離表示は、外国人にとって便利が良かったとは思われない。さらに、1町や1里が何マイルに相当するののかといった西洋人に向けた説明は、本文中で一切なされていなく、差し込まれている地図にも紹介されているすべての場所が示されているわけではない。それぞれの名所の位置に関する案内の少なさから、*The Guide* は、外国人がこの本を片手に京都の街を観光するという実用性を重視したものではなかったと言える。一方、個々の名所の解説では、寺社であれば建立された年と建立した僧侶などの情報を紹介し、取り巻く風景や建物の様子などを紹介するにとどまり、寺の由緒やまつわるエピソードなどの紹介は施されておらず、京都の歴史や文化を知るための読み物として出版されたとするには物足りないように思われる。例えば、清水寺の場合、歴史について当てられた記述は、

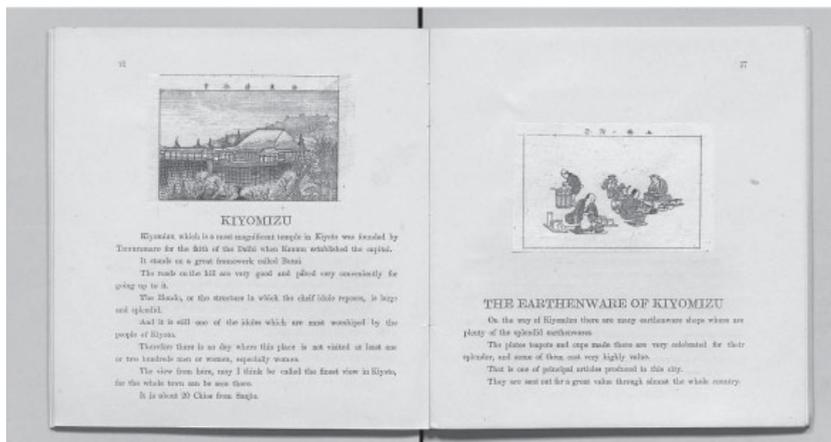


図1 *The Guide* 清水寺の頁 (pp.16-17)

Kiyomizu which is a most magnificent temple in Kiyoto was founded by Tamuramaro for the Daihi when Kanmu established the capital.³²⁾

京都で最も威厳ある寺の1つである清水は、大悲〔稿者注：観音〕のために〔稿者注：坂上〕田村麻呂によって、桓武が都を建設した時に建てられた。

と、2行ほどである。アーネスト・サトウは、1879年に京都を訪れた際、*Stray Notes on Kioto and Its Environs* を読み応えのある京都案内書として携帯していた³³⁾。英文で書かれた京都案内書としては*The Guide* に続いて2番目に古いこの本は、同様に70頁に満たない薄い冊子で、地図は収載せず、京都の街を歩きながら紹介するというスタイルでそれぞれの名所を解説した。この本も旅行案内書としての実用性を重視したものではなかったと思われるものの、各名所の歴史やエピソードについてはしっかりと筆を割いており、読み物として制作されたものだと言えるだろう。例えば、清水寺の項目であれば、建立された歴史にまつわる記述は次のように充実したものとなっ

ている。

The temple, which is sometimes called Otowasan Seisuiji, was built by the Shogun Sakano Uyeno Tamuramaru, in 798, at the time that Kammu established the capital. He called it Kuwanonji, in honor of the god Juichimen Kuwanon. In 801, when proceeding by Imperial command to fight and punish the eastern barbarians, he offered up prayers to the god, and having obtained a great victory, he received permission to build a temple here in the style of the Shishinden, and attached the former name, owing to the Otowa waterfall being situated close by, which is celebrated for its clear, pure water³⁴.

ときに音羽山清水寺とも呼ばれるその寺は、将軍、坂上田村麻呂によって、桓武が都を建設した頃である798年に建てられた。彼はこの寺を、十一面観音にあやかって観音寺と呼んだ。東方の野人たちと戦い、彼らを罰するようという朝廷の命によって進軍し、彼がその神に祈りを捧げ、大きな勝利を手にした801年、紫宸殿の様式でここに寺を建てる許可を得て、清浄できれいな水で有名な、すぐ近くにある音羽の滝のために、先述した名前を付けた。

それぞれの名所に関する解説の内容から、*The Guide* は、外国人がこれ1冊を頼りにして京都の情報を十分得ることができるような、旅行案内書や読み物としての実用性を追求した書物ではなく、外国人向け観光施策の試験的な取り組みであったと言えるかもしれない。

耳塚の詳述

京都に関する情報源として使用されることはあまり想定されずに制作さ

れたと思われる *The Guide* であるが、編集意図なしにまとめられたわけではなかった。制作者の一人である丹羽圭介は、「外国人が入浴出来るやうになつては放尿勝手次第だった街にも溝蓋が出来、辻便所が出来た。或はまたガイド・ブックも出来た³⁵⁾」と、*The Guide* が外国人に京都の好ましい印象を与えること意識した施策の一つであったことを振り返っている。*The Guide* の外国人の目を意識した記述については、工藤泰子からすでに指摘がある。工藤は、*The Guide* において、御所が近世期にはある程度の範囲まで庶民も入ることができ大衆にとって親しみのある行楽地でもあったことにはふれず、「公家や朝廷の高位の官人をのぞいて、博覧会の開幕まで、誰一人宮殿に入ることは許されなかった (No one was admitted to the palace except the Kuges or the high officers in this court till the opening of the Exhibition.)³⁶⁾」と解説している点について、第2回京都博覧会の御所での開催を特別なものとして外国人にアピールする意図的な筆致であったとしている³⁷⁾。本節では、*The Guide* が日本人の側から外国人読者へ向けた京都イメージの発信であったという事実を念頭に入れた上で耳塚の歴史が詳述されていることに注目し、その後の英文京都案内書における耳塚の取り扱いを追うことで、京都の国際的な観光地化がまだ試行錯誤の時期にあったことを示したい。

耳塚は、秀吉の意向によって、現在の七条駅に近い、東山の方広寺の大仏殿のすぐ近くに造られ、朝鮮出兵で戦功の証としてとして持ち帰られた朝鮮人らの耳や鼻が埋められた盛り土の上に、五輪塔を建てたものである。*The Guide* の「耳塚 (Mimizuka)」の項目では、次のように紹介される。

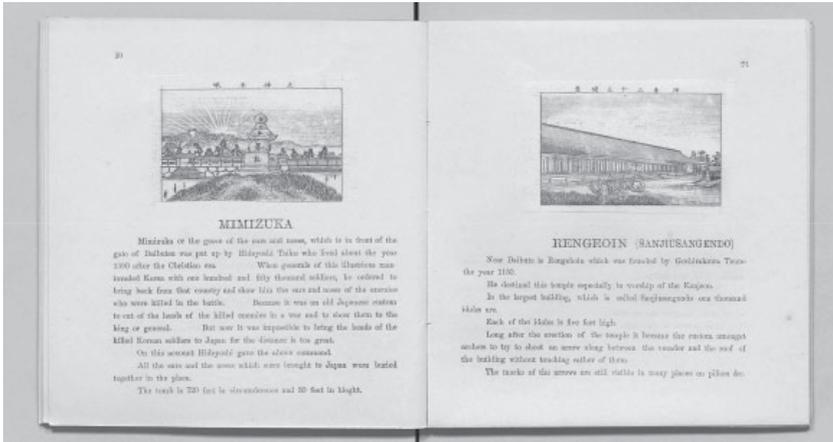


図1 *The Guide* 耳塚の頁 (pp.20-21)

Mimizuka or the grave of the ears and noses, which is in front of the gate of Daibutsu was put up by Hideyoshi Taiko who lived about the year 1590 after the Christian era. When generals of this illustrious man invaded Korea with one hundred and fifty thousand soldiers, he ordered to bring back from that country and show him the ears and noses of the enemies who were killed in the battle. Because it was an old Japanese custom to cut the heads of the killed enemies in a war and to show them to the king or general. But now it was impossible to bring the heads of the killed Korean soldiers to Japan for the distance was too great.

On this account Hideyoshi gave the above command.

All the ears and the noses which were brought to Japan were buried together in the place.

The tomb is 720 feet in circumference and 30 feet in height³⁸⁾.

大仏の門の前に立つ耳塚、または耳や鼻の墓は、西暦1590年頃に生きた秀吉によって設置された。この有名な人物の将軍たちが朝鮮を15万

の兵で攻めた時、彼は、かの国から戦いで死んだ敵の耳や鼻を持ってくるようにと命じた。なぜなら、戦で死んだ敵の首を取って王や将軍に見せることは、日本の古い慣習だったからである。しかし、死んだ朝鮮兵の首を日本へ持ってくることは、あまりにも距離が遠すぎるため、不可能であった。

そのため、秀吉は上記のような命令を下したのである。

日本に運ばれた耳や鼻はこの地に埋められた。

この墓は 7201 平方フィートで、高さは 30 フィートである。

先に引用した清水寺の歴史についての解説と比較して、耳塚の解説の方が建立された背景について圧倒的に詳しく述べられていることが分かるだろう。方広寺の大仏はこの前の頁で紹介されているが、秀吉の命によって作られたことと、天災によって原物が失われたために現在安置されているのが原物には劣る複製であることが述べられているだけで、方広寺の鐘をめぐる家康と秀頼の逸話には言及がない。

耳塚は、日本人にとっては違和感のない京都の名所であった一方、既往研究によって、近世期、幕府が示威行為として外国人の賓客を連れて来る場所であったことが指摘されている。耳塚は、すでに、最も古い京都の名所記である、1658 年（明暦 4 年）に出版された中川喜雲の『京童』に、「又是なる塚の五輪は、秀吉公こまいくさの時切り取り給ひしかの国の人の耳を塚につきこめられしゆへ、耳塚といふ也³⁹⁾」と言及され、近世期を通じて京都の名所として定番化していた。ロナルド・トビは、近世期において、朝鮮通信使の使節を耳塚へ案内し、また市中の人々にその姿を見せることが国内外に対して強い日本をアピールする手段として幕府に用いられていたことを指摘しており⁴⁰⁾、魯成煥による論考は、さらに、同じ目的で、江戸参府の道中、オランダ人も耳塚へ連れて行かれ、耳塚へ詣でるオランダ人が『都林泉名勝図会』（1799）にまで描かれていたことを紹介している⁴¹⁾。両者は、加えて、

明治以降になると、1898年の秀吉の没後300年に合わせて耳塚をはじめとする秀吉の遺構の改修や顕彰を行い、秀吉の朝鮮出兵を過去の偉業として注目させることで、明治政府が対外戦争のプロパガンダとして政治利用したと指摘する⁴²⁾。*The Guide*が制作されたのは、こうした2つの時期の間であり、外国人が、役人に連れて行かれるままではなく、自分の好きなように街を歩けるようになった最初期でもあった。

長谷川雅世によれば、外国人の入浴が許されるようになって以降、京都を訪れたイギリス人観光客の多くは、他の寺社にはない、鐘や大仏といった見ものがある場所として方広寺へと足を運び、彼らの間でこのエリアは定番の観光名所であったという⁴³⁾。にもかかわらず、英文の旅行案内書における耳塚の扱いは、時を追うごとに小さくなっていった。サトウが好んだ*Stray Notes on Kyoto and Its Environs*においても、耳塚は*The Guide*同様、独立した項目が設けられ、取り上げられている。しかし、この本では、建立にまつわる歴史をまず「珍妙な歴史上の逸話 (a peculiar historical story)」と否定的な調子でまとめ、朝鮮に攻め込んだ軍勢が「多くの捕虜の耳を切り落とし、その後、この墓碑の中に戦利品を埋めた。(…cut off the ears of many of the captured prisoners and afterwards buried the trophies in this tomb.)」と手短かに述べ、この地がさらに昔には平家の邸宅であったという説明に移っている。サトウが中心となって編纂し、マレー社の日本の公式ガイドブックとなった*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* (1881)には、2頁にまたがった方広寺の大仏や鐘の歴史に続いて、耳塚の説明が2段組の頁に10行程度で書かれている⁴⁴⁾。1895年に京都府が制作した*The Official Guide-book to Kyoto and Allied Prefectures*は、滋賀や奈良など近隣の県を含めて500頁以上にわたって紹介する大部の旅行案内書であったが、方広寺の鐘や大仏が独立した項目として3頁あまり割り当てられているのに対し、耳塚は、方広寺の附属物として、極端に手短かに扱われている。その説明は、「耳塚、または耳の塚には、秀吉の兵士たちが勝利の戦利品とし

て国に持ち帰った数千の朝鮮人の切り取られた耳が埋められている (the Mimi-zuka, or Ear Mound, where were buried the dismembered ears of thousands of Koreans, which were brought home by Hideyoshi's soldiers as trophies of the victories)」とほんの4行程度でなされた。京都に関する英文の著作を多く遺した秋山愛三郎が執筆し、京都商工会議所内に設置された近畿観光協会から出版された *A Complete Guide to Kyoto* (1935) に至っては、明治に入って再建された豊国神社や、大仏のある方広寺、秀吉の墓についてはそれぞれ項目を立てて紹介しているものの、そのすぐ近くにある耳塚には全く触れていない⁴⁵⁾。

外国人が耳塚へ抱いた印象を考えれば、耳塚が外国人向けの案内書において名所としての位置を著しく後退させていったことも自然なことであった。第1回京都博覧会の際に *The Far East* の記者が京都を訪れ、誌上に市中の名所を観光したレポートを発表した。その中では耳塚に関しても、写真付でふれられており、耳塚に外国人が抱く印象を端的に知ることができる。記事によれば、この「奇妙な碑 (a singular monument)」の歴史を知ったうえで、外国人が「驚きと嫌悪感が縋い交ぜになった戦慄 (a thrill of mingled wonder and disgust)」を経験せずに訪れることは不可能であるという。この記事において最も興味深いのは、記者が訪問前に得ていた情報を京都訪問の際に誰かが訂正し、それによって耳塚の印象がほんの少し改善したことが記録されている点である。記者は、第1回京都博覧会のさらに1年以上前に「横浜の新聞 (Yokohama newspaper)」に掲載されていた「京都への旅の覚え書き ("Notes of a Trip to Kyoto")」という記事によって京都の情報を仕入れていた。そこでは、耳塚の下に秀吉が埋めたのは「彼が朝鮮を侵攻した際に殺害した何万もの朝鮮人の耳 (the ears of several myriads of Koreans whom he slew when he invaded that country)」であると紹介されていたという。しかし、この情報は、記者が京都で次のような説明を受けて訂正される。

I am told that…these warriors, in order as it would seem, to prove how great had been their victory, resolved to cut off the ears of the captured enemy (some thousands in number) and send the ghastly trophies home. This wholesale atrocity being accomplished, their mutilated, but for fighting purposes still able prisoners, were released. (下線部は稿者による) …これらの武士たちは、彼らの勝利がいかに大きなものだったかを証明するために、捕虜にした敵（数にして数千）の耳切り落とし、ぞっとするような戦利品を持って帰ろうと決意したそうだと聞かされた。この大規模な残虐行為が行われたわけだが、彼らの、体を切断された、しかし兵士としてはまだ使い物になる捕虜たちは解放された。

記者が受けた説明と新聞記事が異なっていたのは、切り取られた耳の数と朝鮮兵らの生死であり、この情報の修正は、「それでも十分ぞっとするけれども、何万もの哀れな捕虜を虐殺するのに比べたら、これらの男たちの行いは些細な罪に過ぎないと認めざるを得ない (it must be admitted that, although sufficiently revolting, still the act of the men was but a venial crime, compared with the slaying of several myriads of their helpless captives.)」と、記者の印象に影響を与えた。つまり、耳塚は、そもそも外国人から好意的に見られていない場所であり、捕虜は耳を切られながらもその後解放されたと情報を修正し、印象を少しでも良くしようとわざわざ努力しなければならない場所だったのである。また、少し時代が下っても、欧米の新聞には日本人の残虐性を象徴する遺跡として批判的に取り上げる記事が確認され、日清戦争を嚆矢としてヨーロッパで黄禍論が巻き起こった際には、日本人の残虐性の顕著な例としてイギリスの新聞に取り上げられている。魯によると、1920年代には、耳塚の存在を知ったアメリカ人らが強い反発を示し撤去の願いを当時の朝鮮総督であった斎藤実に提出し、京都府知事もそれに賛意を示して絵ハガキなどの販売を中止させたため、新聞沙汰にまでなったという⁴⁶⁾。

The Guide は従来の、日本人だけが対象であった名所案内記に倣い、名所の一つとして耳塚をとりあげ、背景を知らないであろう外国人の為に英文で解説を付けた。しかし、雑誌などから分かる外国人の耳塚に対する悪印象や、そうした感情を反映して作成されたその後の英文の案内書における取り扱いの縮小は、京都の国際的な観光地化が誘致の対象となる外国人自身との折衝が少ないまま手探りで始められていた状況をより色濃く映し出している。

まとめ

本稿では、日本人の手によって初めてつくられた英文の観光案内書 *The Guide* の検討を、制作背景、全体的な概要、名所解説の具体的な記述という3つの観点から行った。制作背景の検討では、京都に外国人を迎える準備が急ピッチで進められる中、英字の活版印刷という新技術の実践と、博覧協会からの外国人観覧客へ向けた心配りのデモンストレーションとして本著が制作されていたことを確認した。本全体の概要および、具体例として取り上げた耳塚の解説からは、*The Guide* が近世の案内書の伝統に従うまま、日本人の従来の認識における京都の名所を反映して制作されていたことが分かった。そして、その後の外国人向け観光案内書における耳塚の取り扱いの確認からは、京都の国際的な観光地化において、徐々に外国人の視点が入り入れられて名所が選び直されていた変化が具体的に見えてくるのである。

表1 The Guide の名所解説内訳

種類	数	The Guide 目次の項目
街の紹介	2	The City of Kiyoto (京都の街)、Uji (宇治)
寺	26	Chionin (知恩院)、Nanjenji (南禅寺)、Kurodani (黒谷)、Yeikando (永観堂)、Shinniyodo (真如堂)、Ginkakuji (銀閣寺)、Higashiotani (東大谷)、Kiyomizu (清水)、Nishiotani (西大谷)、Daibutsu (大仏)、Rengehoin (Sanjusangendo) (蓮華大院 (三十三間堂))、Shenniuji (泉涌寺)、Tofukuji (東福寺)、Obaku (黄檗)、Nishihonganji (西本願寺)、Honkokuji (本圀寺)、Toji (東寺)、Sheiroji (清涼寺) Ninnaji (Omuro) (仁和寺 (御室))、Daitokuji (大徳寺)、Kinkakuji (金閣寺)、Ishiyama (石山)、Hieizan (比叡山)
神社	7	Gion (祇園)、Niyakuoji (若王子)、Yoshida (吉田)、Inari (稲荷)、Iwashimizu (Yawata) (石清水 (八幡))、Nagaoka (長岡)、Kitano (北野)、Kamigamo (上賀茂)、Shimogamo (下賀茂)
産業	2	The Earthenware of Kiyomizu (清水の陶器)、Nishijin (西陣)
ランドマーク	11	The Bridge, Sanjo (三条大橋)、Goshio (御所)、Maruyama (円山)、Yasaka (八坂)、Mimizuka (耳塚)、Mumenomiya (梅宮)、Arashiyama (嵐山)、Kamogawa (鴨川)、Otsu Katata and Hira (大津堅田と比良)、The Lake Biwa (琵琶湖)、Karasaki (唐崎)、Sheta Awatsu (瀬田粟津)

表2 『京都名所撮影』『開化絵入京都見物独案内』の挿絵との比較対照 (○は、題材、構図ともに類似性が認められるもの。△は、同じ題材を描いているが構図が異なるもの。×は、該当名所の写真や挿絵がないもの。)

The Guide の項目	『京都名所撮影』	『開化絵入京都見物独案内』の挿絵
The Bridge, Sanjo	○ (三条大橋、p.18)	○ (三条大橋、1オ)
Goshio	○ (御所紫宸殿、p.3)	○ (御所、2ウ)
Gion	△ (八坂神社、p.13)	○ (八坂、24オ)
Chionin	△ (知恩院山門、p.15)	○ (知恩院、23ウ)
Nanjenji	×	×
Niyakuoji	×	×
Kurodani	△ (黒谷金戒光明寺、p.19)	○ (黒谷、24ウ)
Yeikando	×	×
Shinniyodo	×	×

Yoshida	×	○ (吉田、25 オ)
Ginkakuji	△ (銀閣寺、p.20)	○ (反転した図) (銀閣寺、25 ウ)
Maruyama	○ (丸山温泉將軍塚、p.14)	×
Higashiotani	×	×
Yasaka	×	×
Kiyomizu	△ (清水寺本堂、p.12)	○ (清水寺、21 オ)
The Earthenware of Kiyomizu	×	×
Nishiotani	△ (西大谷、p.11)	○ (西大谷、20 オ)
Daibutsu	△ (大仏方広寺、p.10)	○ (大仏、19 オ)
Mimizuka	×	○ (耳塚、19 ウ)
Rengehoin (Sanjusangendo)	○ (反転した図) (三十三間 堂、p.10)	○ (大仏三十三間堂、18 ウ)
Inari	×	○ (稲荷、17 ウ)
Shenniuji	×	×
Tofukuji	×	×
Uji	×	×
Obaku	×	×
Nishihonganji	△ (本願寺、p.8)	○ (本願寺、29 オ)
Honkokuji	×	×
Toji	×	×
Iwashimizu (Yawata)	×	×
Nagaoka	×	×
Mumenomiya	×	○ (梅ノ宮、13 オ)
Arashiyama	△ (嵐山渡月橋、p.25)	○ (嵐山、11 ウ)
Sheiroji	×	×
Ninnaji (Omuro)	×	○ (御室、9 ウ)
Daitokuji	×	×
Kinkakuji	○ (反転した図) (金閣寺、p.24)	○ (金閣寺、8 オ)
Kitano	△ (北野天満宮社内、p.23)	○ (北野、8 ウ)
Nishijin	×	×
Kamigamo	△ (上賀茂楼門、p.22)	○ (上賀茂、6 ウ)

Shimogamo	△ (下賀茂本社、p.21)	○ (下賀茂、4ウ)
Kamogawa	×	×
Otsu Katata and Hira	×	×
The Lake Biwa	×	×
Karasaki	×	×
Sheta Awatsu	×	×
Hieizan	×	×

注

- 1) 京都において開催された「博覧会」の名を持つ催しのうち最も早いのは、1871年に西本願寺において開催されたもので、これを第1回と数える文献も見られる(例えば、『伝記叢書 山本覚馬』)。しかし、1928年まで博覧会を運営した京都博覧会協会は、勸業という趣旨を格段に明確に打ち出した1872年に開催された博覧会を第1回とする見方を公式に打ち出している。「博覧会の内容そのものに至つては宛然古物展或は骨董会の感があつて、所謂新時代の産業振興といふ角度から視ると凡そ縁遠い存在でしかあり得なかつたのは是非もない。故に京都博覧協会としてはこの初回を全然除外し、明治五年を第一回として協会年次博覧会の記録としたものである。」(大槻喬 編、『京都博覧協会史略』、京都博覧協会・京都、1937年、pp.9-10) なお、引用に際し、旧字は新字に改めた。) 本稿では、1872年の博覧会をもって第1回とする京都博覧協会の見解に従う。
- 2) 石田徳次郎「ご挨拶」、In *The Guide to The Celebrated Places In Kiyoto & The Surrounding Places*. Yamamoto. Kakuma. 1981 [1873]. Kyoto: Niwa.
- 3) 注1、p.348
- 4) 注2
- 5) こうした研究の代表的なものには、丸山宏「明治初期の京都博覧会」(吉田光邦 編『万国博覧会の研究』、思文閣出版・京都、1986年、pp.221-248)、工藤泰子「明治初期京都の博覧会と観光」(『京都光華女子大学研究紀要』46、2008年、pp.77-100) などがある。
- 6) 福井庸子「明治初期博覧会における展示空間の生成——『博物帖』を手がかりに——」『学術研究 教育・生涯教育学編』54、2006年、p.58
- 7) [unknown]. *The Far East*. III (10) : October, 16. 1872. Yokohama: Wm. A. Miller, p.120
- 8) 注1、p.16
- 9) 並松信久「明治期京都の博覧会 - 「国際化」と「歴史」をめぐる」『京都産業大学日

- 本文化研究所紀要] 12・13、2008年、p.530
- 10) 丸山宏「明治初期の京都博覧会」(吉田光邦 編『万国博覧会の研究』)、思文閣出版・京都、1986年、p.231, p.234
 - 11) 注1、p.29
 - 12) 吉岡拓「第二回京都博覧会の開催 - 「伝統都市」京都の黎明」、『近代日本研究』22、p.199
 - 13) 堀博・小出石史郎 共訳、土居晴夫 解説、のじぎく文庫 編『ジャパン・クロニクル紙 ジュピリーナンバー 神戸外国人居留地』、神戸新聞出版センター・兵庫、p.184
 - 14) 注13、p.270
 - 15) 京都博覧協会 編、『京都博覧会沿革誌』、京都博覧協会・京都、1903年、p.38
 - 16) 『京都博覧協会史略』は、盛況を察した政府が外国事務官楠木正隆を派遣してきたことや、『大阪新聞』が「昨今余程の賑ひにて日々当地より上京する外国人夥しき趣なり。」と報じたことを記し、さらに第1回京都博覧会の総括として「観光都市としての宣伝にも多大の実数を収め」たと述べている。(注1、p.28, p.37, p.38)
 - 17) 注12、pp.209-218
 - 18) 注1、p.18 なお、外国人出品者には、「会場へ所持ノ品差出度者ハ前にテ自国領事ノ手ヲ経テ大阪兵庫ノ内宮庁へ申出其指図ヲ受クベシ」(注15、p.13) と、手続きが二重に必要で、時間的な余裕のなさに加えて、出品のハードルはとても高かったといえるだろう。
 - 19) [unknown]. *The Far East*. III (4) : July 16, 1872. Yokohama: Wm. A. Miller, p.46
 - 20) [unknown]. *The Far East*. III (5) : August 1, 1872. Yokohama: Wm. A. Miller, p.49
 - 21) 注20、p.50
 - 22) 注15、p.61
 - 23) 注10、p.238
 - 24) [unknown]. *The Far East*. III (6) : August 16, 1872. Yokohama: Wm. A. Miller, p.65
 - 25) 「一、此会へ差出す品物は、其持主の名所、并に来由を示すべし。」「一、新規発明品、又世上希有なる物品機関等は、用ひ方をも記すべし。」(注1、p.15-16)
 - 26) Laird, E. K. 1875. *The Rambles of a Globe Trotter in Australasia, Japan, China, Java, India, and Cashmere*. London: Chapman & Hall, p.218
 - 27) Yamamoto. Kakuma. 1981[1873]. *The Guide to The Celebrated Places In Kiyoto & The Surrounding Places*. Kyoto: Niwa, p.1
 - 28) 長谷川獎吾「明治前期の名所案内記にみる京名所についての考察」、『人文地理』54(4)、2012年、pp.33-34
 - 29) <http://www.nichibun.ac.jp/meisyozue/satsuei/c-pg8.html> (2019/9/18)
 - 30) すべての場所への距離が三条大橋を基準に記されているわけではなく、例えば本圀寺は「御所からは24町の距離にある (It is 24 Cios from Goshio in distance)」と表記され

ている。(注27、p.28)

- 31) 山近博義「近世中期の刊行京都図の特徴に関する基礎的考察」、『人文地理 研究発表要旨』、2004年、p.193
- 32) 注27、p.16 なお、*The Guide*の原本画像は、国会図書館デジタルコレクションにおいて公開されているものを用いた(識別子:info:ndljp/pid/1900016、2019/9/18)。
- 33) アーネスト・サトウ(庄田元男訳)、『日本旅行日記2』(東洋文庫)、平凡社・東京、1992年、p.226 なお、*Stray Notes...*は、本文中において、著者不明の「本圀寺の……案内書」として言及されている。
サトウが言及したこのガイドブックは、1876年に横浜で出版された第2版のみ確認することができたものの、初版は未確認であり、初版の書誌も不明である。
- 34) [unknown]. 1876. *Stray Notes on Kioto and Its Environs*. Yokohama: F. R. Wetmore & co, pp.14-15
- 35) 注1、p.348
- 36) 注1、p.3
- 37) 工藤泰子、「明治初期京都の博覧会と観光」、『京都光華女子大学研究紀要』46、2008年、pp.94-95
- 38) 注27、p.20 原本画像は、国会図書館デジタルコレクションによる(識別子:info:ndljp/pid/1900016、2019/9/18)。
- 39) 中川喜雲、『名所記 京童』村田書店、1969年、p.17
- 40) ロナルド・トビ、「近世の都名所 方広寺前と耳塚 - 洛中洛外図・京絵図・名所案内を中心に(特集 世界のなかの近世絵図(2))」、『歴史学研究』842、青木書店・東京、2008年、pp.7-10
- 41) 魯成煥、「耳塚の靈魂をどう考えるか」、『日文研フォーラム』268、p.44
- 42) 注40、p.11 注41、pp.44-47
- 43) 長谷川雅世、「明治時代の京都でのイギリス人旅行者の神社仏閣めぐり:イギリス人の旅行記に描かれた京都の特別な寺々」、『高知大学教育学部研究報告』75、2015年、pp.194-195
- 44) Satow, E. M. and A. G.S. Haws. 1881. *A handbook for travellers in central & northern Japan*. Yokohama: Kelly & co., p.322
- 45) Akiyama, Aisaburo. *A Complete Guide to Kyoto*. Japan Welcome Society: Kyoto, pp.148-151
- 46) 注41、pp.53-55

